
魔理沙は本を借りに行きました

赤い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔理沙は本を借りに行きました

【Nコード】

N1026S

【作者名】

赤い人

【あらすじ】

ある日起きた魔理沙は、紅魔館へ本を借りに行こうと思い立ちました。

(前書き)

八裂き兎さんの企画、魔理沙の弾幕ごっこをテーマに皆で書いてみように参加させてもらい書きました。

いつもより少し長い程度ですが、楽しんでもらえるとうれしいです。

清々しい昼の日差しに、目を覚ます。

「ふあああ………」

——興味津津快活娘『霧雨 魔理沙』

（いつもより）散らかった部屋を見渡し、昨日の事を思い出す。

「確か……新種の魔法キノコ見つけて、実験したけど煮詰まって寝たんだったか」

数個キープしておいた、緑¹の笠に白^Uい斑点が付いたやたら太めのキノコを眺める。

「うーん、絶対良い感じの効果があると思うんだけどなあ………」

異変や魔法等に対して、結構良い嗅覚を持っていると自負しているんだが。

再び散らかった部屋……の本が山になった領域を見る。

付箋が大量に挟まれながらも、どれも思うような効果が得られなかった本たちである。

「そうだ、図書館に行こう」

今ここに欲しい本が無いなら、（死ぬまで）借りに行けばいいじゃないか。

「そうときまれば、善は急げだ！」

昨日から着続けた研究用の服を脱ぎ捨て、風呂に入りさっぱり清潔になってからいつもの服に身を包む。

ミニ八卦炉とマスタースパークの炸薬であるキノコの粉末をエプロンに仕舞い、家の入口まで物が崩れないように慎重に歩く。

入口横にかけてあったトレードマークの帽子をかぶり、立てかけてあった箒を手に取り外に出る。

鍵をかけ、霊夢の結界札で妖精、妖怪に家が荒らされないようにする。

「霊夢から札を買い続けるのも金がかかるし、今回は結界関連の本もいただ……じゃなくて借りに行くとするか！」

そう言って箒を水平にしながら駆け出し、箒に魔力を込めて飛び乗り空へ上がる。

徐々に魔力を高めて加速、飛びそうになった帽子を片手で押さえ、深くかぶり直す。

時折妖精が悪戯に弾幕を撃ってくるが、異変時と比べると見劣りするそれを最短距離で抜けていく。

魔法の森を越え、眼下に湖が広がるころにあいつらが出てくる。

「あ、魔理沙だー！」

——おてんば氷精『チルノ』

「魔理沙さんこんにちわー」

——苦労人な湖の良心『大妖精』

「二人とも元気そうで何よりだ」

妖精の元気が無いと言うのは、自然に元気が無いと言う事と同義であるから、元気であるに越したことは無い……。まあ、元気過ぎても困るっちゃ困るが。

「魔理沙あそばー！」

「あー、残念だがこれから用事があるんだ」

いつもなら遊んでやる所だけど、今日は昼起きで遅くなりかねないから無しだ。

「そうですか……。ごめんなさい魔理沙さん」

「また今度遊んでやるからな！……………うおっと!?」

「へへーん。遊んでくれないなら、無理やり遊んで貰うもんね」

いきなりチルノが弾幕を撃ってくるが、重心移動で箒を横移動さ

せてグレイズ。

「チ、チルノちゃん!？」

「いっつも負けちゃうけど、今日は大ちゃんと二人がかりだ!」

おろおろする大妖精に、無い胸を張るチルノ。

弾幕ごっこの一回程度なら、付き合ってもいいかと思う。

「スペルは2枚! あたいたちに勝ったら進んでいいけど、負けたら遊んでもらうもんね!」

「分かった分かった、少しだけ付き合ってやるよ」

「ごめんなさい魔理沙さん!」

ぺこぺこと頭を下げる大妖精、まったくいいコンビだ。

「魔理沙も急いでるし、さっさと勝負決めちゃうよ!」

——氷符『アイシクルフォール』

温度が下がって周囲に霧が出来、それが集まっていくつもの氷柱となる。

「いっけー!」

ヒュンと風を切って氷柱と、チルノが直接放った弾幕が飛んでくる。

が、射出の瞬間には私はもう射線上から移動していて、チルノに向かって軽く弾幕を――

「危な!?!」

「ごめんなさい!」

――放とうとしたところで、目の前にレポートしてきた大妖精の弾幕を無理やり回避する。

弾幕が私の服を掠って、チツチツと音を立てる。

「おおっ、やばっ!?!」

体勢を崩した所に、チルノの氷柱までやってきてピンチになるが・
・・・・・スペカ宣言!

――光符『ルミネスストライク』

ドンと箒に溜めた魔力を打ち出し攻撃するのと同時に、反動で宙返りして弾幕を回避する。

「きゃっ!?!」

「大ちゃん危ない!」

――氷塊『グレートクラッシャー』

大妖精を守るように、チルノが大きな氷塊でルミネスストライク

と追撃の弾幕を受け止める。

「やるなチルノ！」

氷塊を越えてチルノに弾幕を撃とうとしたけど、寸前に大妖精が居なくなっている事に気付く。

「またか！」

「えーい！」

後ろにレポートしてきた大妖精が、無差別に弾幕をまき散らす。

氷塊でチルノには当たらない位置取りとは………さすがは大妖精、妖精のくせに頭が回る。

「けどまだまだ甘いぜ！」

——魔符『スターダストレヴァリエ』

箒へ一気に魔力を込め、余波で弾幕をまき散らしながら急加速。

大妖精の弾幕を背に、前かがみになってしっかり箒にしがみつきのながらチルノを跳ね飛ばす。

「うわぁーーーーー！？」

「チルノちゃん！？」

「ほい、お仕舞いだ」

急加速による結構な重圧を捌いて後ろに周り、小さな弾幕二つを二人に当てて終了。

「はらへろほろには……………」

「あわわわ……………チルノちゃんしっかりして!？」

チルノが目を回しているが、妖精だしすぐに元気になるだろう。

「じゃ、私はもう行くからな」

「はわわ……………魔理沙さん置いてかないでー!」

大妖精の混乱した叫びが、霧の湖に響き渡るのだった。

「少し時間かけ過ぎたか？」

ちよっと大妖精に悪いことしたかなと思いつつも、暮れてきた日を見て少し飛ばし気味に紅魔館へ向かう。

「すう……………」

——寝る子は育つの見本『紅 美鈴』

門番は……………よし、いつも通り寝ているな。

止める者のいない門を素通りし、一度玄関の扉前に降りる。

「じゃまするぜ！」

「邪魔するなら出て行ってちょうだい、私は忙しいの」

——紅魔館ハウスキーパーの守護神『十六夜 咲夜』

いつの間にか咲夜が扉を開いていて、私は咲夜の横を通って館に入る。

「はぁ……今日は人里に行くから止めないけど、あんまり騒いで私の仕事を増やさない用に魔理沙」

「まあ、善処するさ」

私の返事に溜息を吐く咲夜。

「溜息を吐いてばかりいると幸せが逃げるぜ？」

「誰のせいよ誰の……っていないし」

呆れたように言う咲夜を置いて、ふたたび箒に飛び乗る。

入口の大きさはともかく、館内部は咲夜が空間を広げているので余裕で飛べるし弾幕戦もできる。

ただ、一応咲夜に気遣って徐行で図書館に向かう。

「あ、魔理沙だ」

「おう、フランか」

——久々に部屋を出たら迷った『フランドールⅡスカーレット』
地下への階段でフランと出くわした。

「魔理沙、日はどのくらい？」

「黄昏時だ。部屋にこもってばかりだから時間間隔も失せるんだ。
もう少し外に出た方がいいぞ？」

はふ・・・・・・・・と欠伸をするフランに言う。

最近、宇宙人の姫に毒されて『てれびげえむ』にハマって部屋に
籠りきりだと、この前の宴会でレミリアが嘆いていた。

「んー、善処するー」

「それ、する気ないだろ・・・・・・・・」

あまり人の事は言えない気がするが・・・・・・・・まあ、気にしな
い。

「じゃあな、私は図書館に用があるから」

「あー、手加減してあげてねー」

手加減？

正直、パチュリーは手加減できる相手じゃないんだが。

「……………あんまり一杯本を持って行かないで上げてって話」

「ああ、そういう事か……………まあ、善処するさ」

さっきも咲夜に言ったように答える。

「ご愁傷様パチュリー……………洗面所はどこだっけなー？」

「おいおい……………自宅の間取りも忘れてんのかよ」

ふらふらと飛んで行くフランを呆れながら見送り、地下に降りる。

図書館に到着し、エプロンにいつも入れてる大袋を取り出す。

「よし、どの本を持って行こうか」

——本符『広辞苑の角』

ゴスという鈍い音と共に、私の頭をとんでもない一撃が襲った。

「うああああああ……………のおおう……………」

頭を押さえながらゴロゴロと転がる。

「ふう……………ふう……………ふう……………」

なんとか落ちつき、未だ痛む部分を押さえながら起きあがる。

「酷いぜパチュリー、広辞苑の角は十二分に凶器だ」

「泥棒退治には丁度いい武器じゃない」

——最近、片手で本の山を運んでた『パチュリーノレッジ』

「これだけあるなら、少しくらいいいだろう？」

「良くないわよ。無節操に置いてあるけど、貴重な本も多いのだから」

——紅魔大図書館。

ただの料理本や子供向け童話本から、魔法の深淵を示す魔導書に世界の真理を綴ったとされる書まで、幅広いジャンルが無差別に置かれた混沌の図書館である。

「えー……どうせパチュリー一人じゃ読み切れないんだから、私も手伝ってやってるんだぜ」

「私でも解読しきれない魔導書とか盗って行ってるのに、何言ってるのよ」

むう……さすがに、パチュリーに口じゃ勝てないな。

「スペルは6枚。私が勝ったら本を借りて行くが、負けたらその解読を手伝うぜ！」

「どっちにしろ魔理沙の得じゃないの！ 魔理沙が負けたらそうね……前回盗っていった分だけでいいから返しなさい」

ま、それくらいならいいか。

「じゃ、始めようぜ！」

「今日こそは本を返してもらおうわ！」

お互いふわりと空に飛びあがり、牽制の弾幕を放つ。

それほど密度は無くとも、速度はある弾幕がさっきまで私がいた場所を通り抜けて行く。

「新スペルの実験台になりなさい！」

飛んできた魔導書を右手で開きながらスペル宣言するパチュリー。

——金符『ホワイトタイガークロー』

パチュリーの振るう腕に合わせて、虚空から大量のクナイ弾幕が飛んでくる。

「つく！ 結構速いな！」

細かく速い弾幕を小刻みに動きながらグレイズする。

「せい！」

「うわっ！？ 接近型スペルだったのか！」

目の前に落ちてきたパチュリーの腕と共に、三つの刀が振るわれた。

「うひゃー!?!」

「まだまだ!」

離れるとクナイ弾幕、近寄ると刀。

最近喘息を克服しつつあるパチュリーの動きには目を見張るものがあるので、無理やりクナイ弾幕を突破して距離を取ることにする。

——彗星『ブレイジングスター』

魔力障壁を展開しながらクナイ弾幕を一度突破、Uターンしてパチュリーへと突っ込む。

「いっけー!」

「ならこれよ!」

——水符『スピニングブラックタートル』

パチュリーの周囲を大量の水が回転し、私の突撃をいなして弾き飛ばしてきた。

「のわっ!?!」

さらには、四つの水流が回転の勢いそのまま噴き出してきて追撃を

かけてくる。

なんとかグレイズするが、回転速度が上がってきた上に勢いよく飛び散る水滴が弾幕として襲いかかり始める。

段々と追いつめられるが、このスペルには弱点がある！

——星符『グラビティービート』

「上下がガラ空きだぜ！」

「対策はしてあるわ！」

——木符『ブルードラゴンジェム』

今度はパチュリーの周りを空気が乱回転し、白い宝玉のように覆い尽くした。

そして、弾幕が落下し——

「おいおい、嘘だろ！」

——弾幕が削り取られた。

さらに周囲の空気も動き、乱気流が生まれて姿勢制御も厳しくなる。

その空気に散発的な弾幕が乗る……それ自体は密度が薄い
いが、乱気流でランダムに動いてくるので油断なんてまったく出来ない。

しかも、パチュリー自身というか風の削岩機が突っ込んでくるおまけつきだ。

一旦全力で乱気流の外に出て、ミニ八卦炉に炸薬を入れて魔力を起爆させる。

「これなら！」

——恋符『マスタースパーク』

光が視界を埋め尽くす……手応えはあった。

光が消えた先、パチュリーが落ちて行くのが見えたが——

——火符『レッドバードテイル』

——何故か自爆し、大量の羽のような炎が舞い落ちてくる。

「蘇生系スペルか！」

「そう言う事！」

腕の延長のようになった炎の羽を回避し、飛び散る火の粉をグレイズする。

火の粉が厄介だが、蘇生がメインだからか先のスペルたちほどの脅威は無い。

時折弾幕を撃ち返し、距離を取る。

——スペルブレイク

「時間切れね……スペルを一枚削っておきたかったのだけど」

「いや、危ないところだったぜ」

確かに先のスペルより脅威は無かったけど、身体強化して振るわれる炎の羽はフランのレーヴァテインのようで恐ろしかった。

「まあ、良いわ。ここまで準備が整ったのだから」

「どういうことだ？」

準備だって？

「魔理沙、段々とスペルの威力が上がってきていたように思わない？」

「確かに……風のスペルの威力は恐ろしかったし、火も蘇生に力を使った割にフランのレーヴァテインのようだった」

待て……このスペルの順番にその名前は確か！

「五行思想にその聖獣か！それで力を段々上げてきていたのか」

「正解……じゃあ、5枚目行くわよ！」

——金水木火土符『ゴールドカイザードラゴン』

圧倒的な質量を持った、黄金色の竜のゴーレムが攻撃してくる。

「やっば！」

顎門あぎとを開き突撃、それだけのことで暴風が発生し、体から散る土が弾幕として襲いかかってくる。

あれだけの質量なので、さすがに動きが重いのが救いか。

ファイナルスパークでも削りきれるかどうか……なら！

ミニ八卦炉にいつもより多めに炸薬を込め、魔力を溜め始める。

「無駄よ魔理沙！ 計算上、あなたのファイナルマスタスパークでもこの竜を削りきれないわ！」

「だから頭でつかちって呼ばれるんだぜパチュリー！ 勝負はやって見ないと分からないから面白いんだ！」

そう、今までだって勝てないと思う相手に何度も挑んできた。

時には勝って、時には負けた。

そのどれもが接戦だったのは、私がなんとしてでも喰らい付いて行ったからだ。

魔力充填200%

ミニ八卦炉が光り輝く。

「行くぜ新スペル！」

「なにを!？」

——恋魔砲『ダブルファイナルスパーク』

強力な衝撃と共に一発目のファイナルスパークを発射、反動に軋む体を見失って高速で移動して二発目を放つ。

「そんな！ 私の竜が!？」

光が止み、戻った視界に映ったのは胴体到大穴を開けた竜がぼろぼろと崩れる姿だった。

「へっ………やってやったぜ………」

が、後一枚スペルを残して体力を削られ過ぎた。

「私の竜を倒すなんて、良くやったわね魔理沙。だけど、これで終わりよ」

竜を倒されて取り乱していたパチュリーだが、さらなる切り札があるのか大分落ち着いている。

「出来たら、満身創痍の私に油断して………とかだいいなあ」

「ふふ………あの竜を倒した魔理沙に油断する訳無いじゃない。時間も良い頃ね………コア、天蓋を開きなさい」

以前ロケットを発射した天蓋が開き、夜空と月が現れる。

「ふふ、今日は満月・・・・・・・・このスペル最高の威力を見せてあげる」

「まじかよ・・・・・・・・」

再び飛んできた魔導書をパチュリーが天に掲げると、天蓋の穴から注いでいた月の光が集束してその書に力が溜まっていくのが分かる。

「行くわよ魔理沙・・・・・・・・死ぬ気で抵抗してみなさい」

——月光『サテライトキャノン』

ファイナルスパークをさらに超えた一撃が放たれる。

その光の前に私は・・・・・・・・心底面白そうに笑っていた。

「いいぜ、パチュリー！ 弾幕はやっぱりパワーだぜ！ そして・・・・・・・・パワー勝負で私が負けるわけにはいかないからな！」

ただのファイナルスパークでは勝てない、ダブルファイナルスパークでも押されるだろう・・・・・・・・なら、それを一点に集束させる！

「持ってくれよ八卦炉」

あるだけの炸薬をミニ八卦炉に入れ、前方に構えて魔力を限界一

杯に込める。

帰ったらこーりんに見せないと、なんてふと思って笑い……
・・魔力を解放する。

――成就『アルティメットスパーク』

ドンツと、今までにない反動で後ろに飛ばされていくが、箒に魔力を込めて必死に踏ん張る。

二つの光が衝突し、光を突きぬけたわずかな光が――

「……………無茶するわね」

――パチュリーは魔導書を弾き飛ばした。

「……………おおおおおおおおおおお！！」

――魔符『シューティングスター』

そして、残留する光を越えた魔理沙が……………ぽすつとパチュリーの胸に収まった。

「すう……………」

「本当に無茶するのだからこの子は」

疲れきって寝てしまった魔理沙を支えながら、パチュリーは図書館を出た。

小悪魔が魔理沙の帽子と箒を持ってついて行き、図書館での戦いは終わるのだった。

（後書き）

今回は魔理沙がテーマだからか、熱血になった気がする・・・。
。　　なんだか密度のない弾幕ごつこですが、読者の方の想像で弾数を補完していただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1026s/>

魔理沙は本を借りに行きました

2011年10月6日08時53分発行